OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西洋近代文明と向き合った漢学者 : 西村天囚の「世界一周会」参加
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2020, 60, p. 1-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西洋近代文明と向き合った漢学者

―西村天囚の「世界一周会」参加―

湯浅邦弘

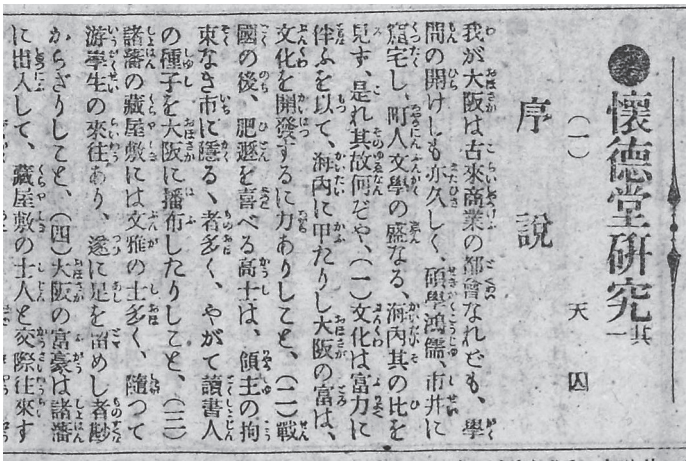
序言

明治四十三年（一九一〇）四月六日午後三時、微風細雨の中、朝日新聞社主催第二回「世界一周会」会員を乗せた東洋汽船会社地洋丸が、銅鑼の音と歓呼の声に送られて横浜を出港した。その中に、特派員の一人として参加した西村天囚がいた。



西村天囚

西村天囚（一八六五～一九二四）は、大隅国種子島西之表（現在の鹿児島県西之表市）出身。名は時彦、字は子駿、号は天囚・碩園。初め郷里の儒者前田豊山に学び、明治十六年（一八八三）、東京大学古典講習科に入学。中退の後、大阪朝日新聞に入社した。コラム「天声人語」は天囚の命名によるとされる。主著に、博士学位の取得につながった『日本宋学史』がある。天囚は、江戸時代の大阪学問所「懐徳堂」（一七二四～一八六九）に強く惹かれ、その学舎の復興を目指した。具体的な活動の一つとして、大阪朝日新聞に「懐徳堂研究其一」を連載する(1)。



懷德堂研究 其一

（一）　天　囚

序　說

我が大阪は古來商業の都會なれども、學問の開けしも亦久しく、碩學鴻儒、市井に窟宅し、町人文學の盛なる、海内其の比を見ず、是れ其故何ぞや、（一）文化は富力に伴ふを以て、海内に甲たりし大阪の富は、文化を開發するに力ありしこと、（二）戰國の後、肥遯を喜べる高士は、傾主の拘束なき市に隱るゝ者多く、やがて讀書人の種子を大阪に播布したりしこと、（三）諸藩の藏屋敷には文雅の士多く、隨つて游學生の來往あり、遂に足を留めし者尠からざりしこと、（四）大阪の富豪は諸藩に出入して、藏屋敷の士人と交際往來す

「懷德堂研究」第１回冒頭部（明治43年２月７日付大阪朝日新聞）

ここに掲げたのは、その記念すべき第一回の紙面。明治四十三年（一九一〇）二月七日付である。「其一」の連載は、二月二十七日まで二十回に及んで一旦完結した。(2)「懷德堂考下巻」の連載が再開されたのは、明治四十四年（一九一一）五月二十四日であった。このような長い中断があったのは、資料収集のために時間を要したこともあるが、もう一つ大きな理由があった。それが、第二回世界一周会への参加である。再開された連載は、同年七月九日まで続いて完結した。上下の合計は六十二回となる。

それでは、このような懷德堂復興運動の最中に天囚が参加した「世界一周会」とは、どのような意義を持っていたのであろうか。なお、天囚は慶応元年（一八六五）七月二十三日の生まれ。世界一周会の敦賀帰着は明治四十三年（一九一〇）七月十八日であったから、この世界一周会参加は天囚満四十四歳後半頃の出来事となる。

本稿では、この世界一周会を取り上げるが、考察の視点としては、世界一周で天囚が見た「世界」とは何だったのか、ということを第一としたい。民間人が外国に行くということ自体が極めて珍しかった時代に、諸外国はどのように天囚の目に映ったのか、また、漢学者でもあった天囚は「世界」とどう向き合ったのか、という点に注目してみたい。(3)中心的な資料は、天囚の『欧米遊覧記』（明治四十三年十月、朝日新聞合資会社、全六一〇頁）である。

なお、以下、原文の引用に際しては、基本的に原著の表記を尊重するが、旧漢字は現代日本の通行字体に改め、かなは現代仮名遣いに改める。また、当時の書籍・新聞に付されている総ルビは外し、必要な箇所のみについて付すこととした。引用した原文の末尾の数字は、西村天囚『欧米遊覧記』の該当頁数である。

一　第一回世界一周会と当時の世界情勢

そこでまず、第二回の二年前に実施された第一回世界一周会の概要を確認してみよう。朝日新聞社主催第一回世界一周会については、杉村楚人冠『半球周遊』（有楽社、一九〇九年一月）、石川周行『世界一周画報』（博文館、一九〇八年九月）、小林健『日本初の海外観光旅行―九六日間世界一周』（春風社、二〇〇九年）などに詳しい。

企画を立案したのは、東京朝日新聞社の杉村楚人冠（名は広太郎）であった。杉村は、東京朝日新聞社に入社する明治三十六年（一九〇三）まで、アメリカ公使館に通訳として四年間勤務。明治四十年（一九〇七）、伏見宮貞愛（さだなる）親王が明治天皇名代として渡英した際、ロンドンに特派され、その記事を朝日に連載、翌年一月『大英游記』として出版している。こうした経歴を活かして世界一周会を創案した。

明治四十一年（一九〇八）三月十五日の大阪朝日新聞社説によれば、その目的は、第一に参加者が世界の観察に努めること、第二は諸外国に日本国民を知らしめること、の二つであったという。

> 「此の際吾人は二の希望を有す。一は会員諸氏が各自十分に観察を尽くして遺憾なからん事、二は諸外国人をして我が国民を知らしむる事是なり。蓋し本邦の世界に於ける地位は目下此の二点を必要とすればなり」（明治四十一年三月十五日大阪朝日新聞社説）

こうした目的が立てられた背景として、同社説は次のように説く。それは、当時の日本が世界から「不可思議」の目で見られていたことであるという。また、日清・日露戦争に勝利した「新進国家」として畏敬される一方、「好戦国・野心国」として排斥されていたというのである。

> 「帝国は目下世界に於て不可思議の地位に立てり。一方に於ては新進帝国として畏敬せらるると同時に、他方に於ては好戦国野心国として排斥せらる。本邦外交の動（やや）もすれば難問題を惹起せんとするは、蓋し之が為なり」（同）

この時期の世界情勢を確認してみよう。日本は、日露戦争（一九〇四～一九〇五）に勝利したが、その後、ロシアやアメリカと対立した。ポーツマス会議（一九〇五年九月）と前後して、アメリカのカリフォルニアでは日本移民排斥運動が起こり、明治三十九年（一九〇六）、サンフランシスコで日本人学童の通学が禁止された。翌一九〇七年、サンフランシスコで排日暴動が起こり、一九〇八年には、日米紳士協約（対米移民制限に関する協約）などにより、ハワイの日系移民会社が全て消滅した。

こうした状況下で企画され、実施されたのが、第一回世界一周会だったのである。この民間人団体による世界一周旅行により、日本国民が見聞を広め、帰国後にその成果を各方面に伝えること、そして、日本国民が文明国民として恥ずかしくないことを世界に知らしめることが期待されたのである。同社説は、こう締めくくる。

「要するに吾人の今回の挙に期待する所は、よく我が国民の謹厳淳雅にして文明国民に伍して毫も恥ずる所なきを彼等外国人に知悉せしむると同時に、会員各自十分に其の観察を遂げ、親しく世界的文明に接して見聞を広め、帰来之を各方面に伝播せん事是なり」（同）

この旅行は、一新聞社が企画し、民間人が参加したものではあったが、単なる観光旅行ではなく、国家の威信をかけた大事業だったのである。

二　第二回世界一周会の概要

では、その二年後に実施された第二回世界一周会は、どのようなものだったのであろうか。まずはその目的を確認してみよう。第二回世界一周会については、特派員西村天囚が現地から紀行文を送稿して順次朝日新聞に掲載された。帰国後、天囚はそれをまとめて、『欧米遊覧記』として刊行した。

そこに記載される「第二回世界一周会縁起」によれば、目的は、第一に国民の知識を啓発して国家社会の進展に資すること、第二に、国内外の人々との親交により、国交を厚くすることであった。第一回世界一周会とは表現が多少異なるものの、その趣旨はほぼ同様であ

る。

「我が朝日新聞社主催の世界一周会の目的二あり、一は国民の心胸を開拓し、知識を啓発して、国家社会の進運に資するに在り、一は中外国民間の歓を聯ねて、国交を無形に敦くするに在り」1

但し、「国民間の歓を聯」ねると、旅行の楽しみが謳われている点は、第一回との大きな違いであろう。第一回の異様な意気込みと緊張感に比べれば、この第二回は、旅行本来の楽しさを求めようとする一面もあったことが分かる。

旅程については、企画段階と最終段階でやや異なるものとなった。はじめ、明治四十三年（一九一〇）一月四日付朝日新聞社告により朝日新聞社主催「世界一周会」の実施が予告された。その際、日英博覧会開催に合わせて、特にロンドンの滞在日数を多くするという趣旨が表明された。

「日英博覧会を主眼としたるものなるが故に倫敦滞在日数を足かけ二十一日としたり、其の外重なる都市の足かけ日数はシカゴ四日、紐育六日、巴里五日、伯林三日、彼得堡二日、莫斯科二日なり、但し汽車汽船の都合にて日数に幾分の伸縮なきを保すべからず」6

ここに言う日英博覧会とは、イギリスのロンドンで、一九一〇年五月十四日～十月二十九日まで行われた日英共催の博覧会である。日本初の国際博覧会であり、二十世紀初頭の西洋における日本に関する最大の催しとされる。名誉総裁はイギリス側がコンノート親王、日本側が伏見宮貞愛親王であった。第二回世界一周会は、この博覧会視察を大きな目玉としていたのである。

しかし、その後、旅程は三週間延長され、最終的には全百四日間となった。延長された経緯について、西村天囚『欧米遊覧記』は、会員からの強い要請があったためとしている。関西会員の打ち合わせを大阪で開き、関東会員の打ち合わせを東京で開催したところ、全会一致で旅程延長の決議が採択されたという。これにより、アメリカ滞在を一週間延長して、ワシントン、ボストンなどを充分に視察し、また、三千年の歴史を有するローマと山水の美に優れたスイスの観光のため、二週間を延長することにしたという。

「関西会員の打合を大阪に開き、関東会員の打合を東京に開きし結果、東西会員の旅程延長の決議一致して、我が社に要求する所あり、我が社は会員の希望黙止し難しと為し、遂に予定の旅行日程を変更して三週間を延長せり、其の内容は、米国滞在を一週間延長し、華盛頓ボストンに遊びて新進文明国の視察を十分にせんことを欲し、次には三千年来世界の歴史に勇気知識美術の大貢献を為したる羅馬帝国の旧土伊太利と、山水の美欧洲に冠たる瑞西とを観んが為に、二週間を延長したるに在り」14

この変更により、会費は当初予定されていた一九五〇円から二四五〇円となったが、朝日新聞社は、三週間延長の割には増額分が抑えられているとして、「前回よりも遙かに利益が多くまた趣味も深いが、それにもかかわらず、増加した会費はアメリカで一五〇円、イタリア等で三五〇円に過ぎない」と述べている。

なお、第一回・第二回とも会費は二千円を超えているが、これは現在の貨幣価値に換算していくらくらいになるのだろうか。第一回世界一周会について考察した小林健『日本初の海外観光旅行』は、夏目漱石『坊ちゃん』の主人公の初任給が四十円であったことを指標に、現在の大卒初任給と比較し、第一回世界一周会の最終的な会費二三四〇円は五千倍の一一七〇万円に相当するとした。また、白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中公新書、一九九八年）は、白米と鉄道運賃から考えて、三千倍の七〇〇万円とする。これらの説に対して、上田卓爾「明治期を主とした「海外観光旅行」について」（『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』第六号、二〇一〇年）は、いずれも正確さを欠くとして、より妥当な数値を算出するために「戦前基準総合卸売り物価指数―総平均（明治三十三年～昭和六十年）」を用いて千五百倍とし、三五〇万円程度と推定する。いずれにしても、現在の短期海外パック旅行からは想像できないかなりの高額である。

こうした壮大かつ長期の海外旅行については、当然代理店が必要となろう。この第二回世界一周会でも、第一回と同じく、イギリスの旅行代理店トーマス・クック社がツアーを請け負った。クック社は一八四一年の創立。ツアー会社の先駆けである。当時、世界百四十六カ所に支店を展開し、明治四十年（一九〇七）三月には、横浜元居留地海岸通りに日本支社を開設している(4)。

それでは、具体的な旅程等を確認してみよう。当初、予告されたのは、明治四十三年（一九一〇）四月六日横浜出発で、帰国は六月二十八日越前敦賀帰着、の八十四日間というものであった(5)。しかし上述のような延長があり、最終的には、七月十八日敦賀着の百四日間となった。

参加申し込みはどのようになされたのだろうか。一月五日付の社告として、朝日新聞社は、「申込手続及びその他の注意すべき事項」を以下のように発表した。

一　必要書類　会員たらんことを希望する者は本社より一定の申込書を受取り之に左の事項を詳記し、戸籍謄本及医師の健康診断書を添えて東西両朝日新聞世界一周会係へ申込まるべし
姓名▲住所身分▲年齢職業▲健康状態▲海外曾遊の経歴の有無▲外国語を解するや否や▲取引銀行の名▲欧米に親戚知己の滞在する者ありや否▲東京又は大阪に居住する親戚知己▲欧米旅行中発病等の場合に何人が引受くるべきや▲又婦人の申込者は其の同伴者又は保護者の姓名

二　会員の選択　本社は会員の成るべく各地に渉り各般の職業に渉らんことを希望するが故に其の選択及び団体編成の権を保留す

三　申込期限　は二月十日迄とす、本社は二月廿日迄に其諾否を決すべし

四　会費支払　本社より入会承諾の通知に接したる時会員は本社の請求に従い会費一千九百五十円の内先ず百五十円を納め次で其の残額を納めらるべし

五　費用の増減　天災其の他予知すべからざる障碍により予定の行路を変じたる場合には総費用も従って増減するものと知るべし

六　中止の場合　日本出発前已むを得ざる事情により本社自らの計画を中止したる場合には予納の会費に相当の利子を附し全部返却すべし

七　会員の旅行中止　総会員確定の後会員自ら此の行を中止する時は船切符購入等により醸したる損失を負担するものとす、旅行の途中会員の都合により退会する場合も亦右に準ず

八　待遇　日本より英国に至る間は汽車汽船共一等とす、欧州見物中及びシベリヤ鉄道は欧州中流以上の人士の常例に倣い船車共二等、浦潮より日本迄は更に一等とす

九　案内　トーマスクック社は其の紐育支社員をして桑港迄出迎えしめ爾後全行路を通じ常に一人又は二人の嚮導主任を随行せしむ、又必要の場合には数名の地方案内者を使用し説明等に遺憾なからしむべし、市中見物の場合も同社の馬車又は自働車を供給す

ること前回の通りなり

十　旅行券　会員各地方庁に出願し受取らるべし、但し都合により本社にて一纏めに出願することあるべし

十一　手荷物　各国共汽車に手荷物の制限あり其の制限を超ゆる運賃は会員の自弁たるべし

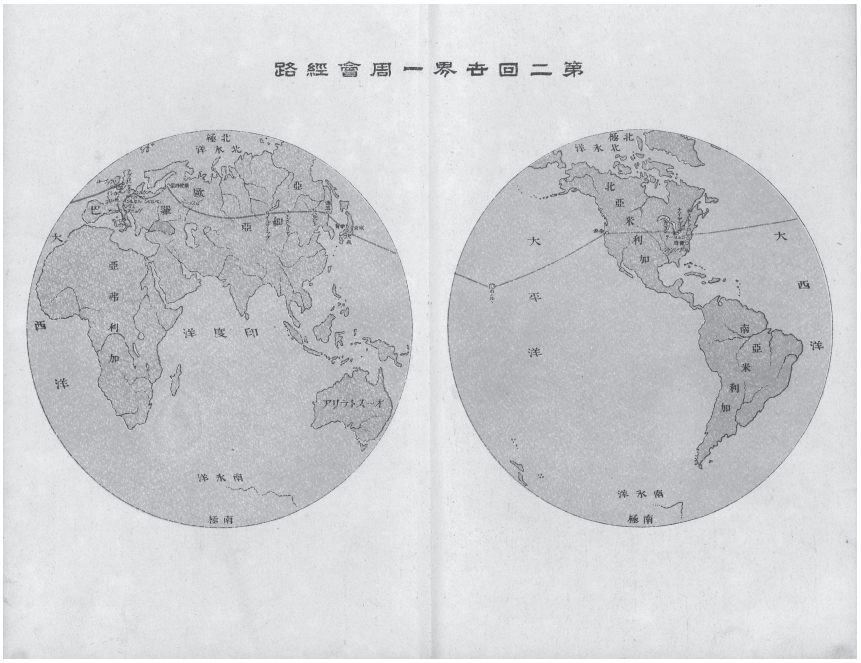
十二　服装　旅行中会員の服装は洋服たるべし、但し婦人に限り日本服に草履にて差支なし

十三　入会申込　は六日より受くるべし

ここで特に注目されるのは、第一回と同じく、会員の選択については朝日新聞社が権限を持つこと、その選択に際しては、なるべく各地の様々な職業にわたることを望むという方針が示されたことである。また、服装も原則として「洋服」が指定された。これは、この世界一周会が決して物見遊山の旅ではなく、世界の人々に文明国たる日本を示すという大きな目的があったからである。(6)

そして、三月十日には、「世界一周会員及び特派員氏名」が発表された。会員五十二名、特派員五名の計五十七名である。(7)また、三月三十日の社告として、「確定旅行日程（三週間延長）」が発表された。西村天囚『欧米遊覧記』冒頭に掲載された経路図とともに列挙してみよう。なお、地名の漢字表記は原文のままで、（　）内のカタカナは筆者（湯浅）の注記である。(8)

四月六日　横浜発
四月十六日　布哇（ハワイ）着
四月二十二日　桑港（サンフランシスコ）着
四月二十三日　同地滞在
四月二十四日　同地出発
四月二十七日　シカゴ着
四月二十八、二十九日　同地滞在
五月一日　ナイヤガラ着



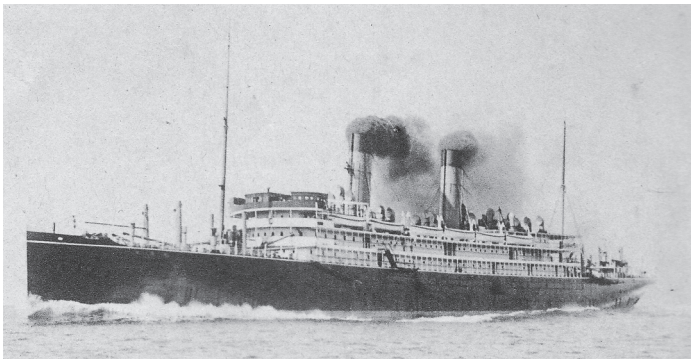
第二回世界一周会経路（西村天囚『欧米遊覧記』）

五月二日　ボストン着
五月三、四日　同地滞在
五月五日　同地出発汽船中に一泊
五月六日　紐育（ニューヨーク）通過ワシントン着
五月七、八日　ワシントン滞在
五月九日　ワシントン出発紐育着
五月十～十三日の四日間　紐育滞在
五月十四日　バルチック号にて紐育出発
五月二十一日　リヴァプール着直に出発倫敦（ロンドン）着
五月二十二～六月三日まで十三日間　倫敦滞在
六月四日　倫敦発巴里（パリ）着
六月五～八日の四日間　巴里滞在此間ヴェルサイユに行く
六月九日　巴里出発
六月十日　伊太利（イタリア）ゼノヴァ着
六月十一日　ゼノヴァ発羅馬（ローマ）着
六月十二～十四の三日間　羅馬滞在
六月十五日　羅馬発ネープルス着
六月十六日　ヴィスヴィヤス、ボンペイ見物
六月十七日　ネープルス発羅馬帰着
六月十八日　羅馬発ヴェニス着
六月十九日　ヴェニス滞在ゴンドラ船にて市中見物

六月二十日　ヴェニス発ミラン（ミラノ）着
六月二十一日　ミラン発瑞西（スイス）ルセルン着（湖畔に二泊）
六月二十三日　ルセルン発独逸国（ドイツ）マインツ着
六月二十四日　マインツより汽船にてライン河を下る
六月二十五日　ケルン着
六月二十六日　ケルン発伯林（ベルリン）着
六月二十七～三十日の四日間　伯林滞在ハンブルグ、ポツダム等の見物の余裕あり
七月一日　伯林発
七月二日　セントペテルブルグ着（朝）
七月三日　露都滞在
七月四日　ペテルブルグ発（午後）
七月五日　モスクワ着（朝）
七月六日　モスクワ発（午後）
七月十五日　イルクーツク着
七月十六日　浦潮斯徳（ウラジオストック）着
七月十七日　鳳山丸にて浦潮斯徳発
七月十八日　敦賀に帰着

三　西村天囚の見た「世界」

こうして、明治四十三年（一九一〇）四月六日、横浜を出港した旅行団は、地洋丸で十日かけて、最初の寄港地ハワイのホノルルに着



地洋丸（西村天囚『欧米遊覧記』）

いた。いよいよ異文化との接触が始まったのである。天囚は、詳細にその様子を記述していく。多くは、日本には見られない諸外国の風景に感動し、また先進的文明に賛辞を送るものであった。

まずハワイでは、その草木の種類の多さと美に感動する。天囚は種子島という南国の出身であったが、その天囚をしても、ハワイの草木の数々は見慣れぬものであった。動植物の名を多く記している文献として、天囚は、五経の一つ『詩経』、後漢末の字書『釈名』（劉熙著）、江戸中期の百科事典『類聚名物考』（山岡浚明著）を揚げつつ、それらの文献もこのハワイの草木の種類の多さには及ばず、海外旅行には、地理歴史はもとより、植物学の知識も必要だと説く。

「先ずワイキキの浜さして市内を通過す、左手なる広庭に一傑閣ありて米国旗幾旒となく立てたるは布哇政庁なり、前朝の故宮とかや、家皆低くして庭皆広きは、新開地の習、戸数未だ多からずして、余地甚だ裕なりと知らる、其の広やかなる庭には、見慣れぬ草木多く椰子、まんご、棕櫚なんどこそ其と知らるれ、花の色麗わしき、木の葉の異様なる、熱帯植物の数々目もあやなり、詩三百篇は草木禽獣の名を知るとあれど、釈名も名物考も此処には及ばず、旅行に欠く可らざる歴史地理勿論ながら、植物学の知識も亦必要ぞかし」38

また、四月二十二日に到着したサンフランシスコでは、宿泊したフェアモントホテルの設備に注目する。部屋の中に筆記具と明滅自在の小電灯台があり、読書に便利であること、清潔で埃（ほこり）がないこと、ホテル内に読書室、舞踏室、日本風中国風の売店もあることなどが書き留められている。天囚がこうしたホテルの設備に注目するのは、「明治五十年」（一九一七）に「日本大博覧会」の開催が予定されていたからである。(9) 諸外国からの多くの旅行客に対して、日本はこうした快適な設備を提供できるのだろうかとの思いがあったのであろう。

「寝台の右には机あり、紙墨備わり、左には小電灯台あり、小さき鎖を引けば明滅自在、寝ながら書を読むを得べく、設備の完全なる、乾々浄々、一塵を留めざる、誠に旅情を慰けるに足れり、聞けば此の室一日食事附五弗なりとぞ、其の外客室二間三間も打続きたるありて、如何なる贅沢も望み次第、一巡見物したるに読書室、舞踏室、日本風支那風の売場もあり、明治五十年の大博覧会を目前に控えながら旅館設備を有せざる日本人の目には、羨みの色ありありと読まるるなるべし」78

ちなみに、近代日本の都市ホテル（洋式ホテル）は、慶応四年（一八六八）に新築された築地ホテル館が最初であり、その後、明治末年頃に至っても、欧米からの旅行団を受け入れられるような洋式ホテルは数えるほどしかなかった。(10)

そして、旅行団は四月二十三日、ホテルの前庭で集合写真を撮影した後、十一台の車に五人ずつ分乗して、市内見学に出かけた。天囚が注目したのは、その「自働車」である。(11)「疾風の如き」と形容し、あまりに速くて、油絵を展開したような風景が過ぎ去っていくと記す。また一方で、絵葉書などが流行る当今では、何となく見たことのあるような景色でもあるとの感想を述べる。

「此の日巡覧せし区域頗る広けれども、疾風の如き自働車上の見物なれば、殆ど油絵を展開せし前を走り過ぎしが如し、……但し、交通の便開けし世とて、将た絵葉書の流行る世とて、何となく曾遊の地のようなる心地すめり」83

また、サンフランシスコからシカゴに向かう急行列車の中でも、その揺れの少なさに注目する。天囚はかつて、第一回世界一周会の紀行(12)を杉村楚人冠が汽車の中で書いたとしていたことに対して、よくも書いたものだと呆れていたという。しかし、この急行列車に乗車してみると、区画ごとに机と小電灯があって読書に便利であり、動揺も少ないとの実感を記している。

「一区毎に長さ三尺余竪七尺五寸許の板を中間に置きて机案と為すべく、毎区二個の小電灯ありて明滅自在、読書に便ならしむ、第一回世界一周の楚人冠の通信に、汽車中に認むとありしを見て日本の狭軌鉄道の大動揺を思い比べて、能くも書きしもの哉と呆れしが、成程書けば書けるなり」91

大陸横断鉄道により、五月二日に到着したボストンでは、図書館[13]を視察し、その自由閲覧の様子に感嘆している。蔵書数は八十三万六千冊、二週間以内であれば貸し出し無料、特別書を除き閲覧は自由、という点を天囚は「自由国の自由」と評価し、国民道徳の発達したものだとして羨望のまなざしを注ぐ。そして当時の日本の読書界を省みて、図書の貸し借りの際、仮に借用書を入れても、期日を守らないことしばしばであり、又貸しの末の紛失もあると指摘する。東洋道徳は「廉恥」を重んずるが、この点において西洋には及ばないと感じたのである。

「蔵書総て八十三万六千冊あり、二週間以上携え帰るにあらざる以上、観覧無料にして、出入門鑑あるに非ず、又或る部分は観者自ら必要の書を随意に書架より抽出し得べからしむとぞ、真に是れ自由国の自由、いといと羨ましからずや、是れ併しながら国民道徳の発達を証する者にして、道に遺を拾わざる先聖の治も之に過ぎじ、我が邦読書界の如きは、借用書を入れてだに、往々期日を過ぐるも返さず、甚だしきは又貸の末が紛失、図書館の如きも、書冊中の一二葉を切取る者すら無きにあらず、自由観覧を許しなば、盗み去る者もやあらん、東洋道徳は廉恥を尚びて義利の弁えを重んずるも、其の効果却て西洋に及ばざること多きは、返すがえすも恥かしなど、同行の人々と物語る」129

なお、ここに言う「道に遺を拾わざる先聖の治」とは、『史記』孔子世家に記される孔子の故事である。孔子が魯の定公の補佐役となった時、政治が大いに整い、商売する者は価格を偽らず、男女は道を別にし、落とし物があっても拾う（着服する）者がいなかったという。天囚は漢学者らしくこの故事を引き合いに出して、アメリカの図書館における公共心の高さを評価するのである。

そして、五月七、八の両日滞在したワシントンでは、アメリカの首都としての風格を感じている。その町並みに何となく心落ち着くと感想を述べ、道路の清潔さと広場の緑樹に注目し、さらに電線が地下に埋設されていて、頭上に蜘蛛の巣が張り巡らされているような鬱陶しさがないという。

「華盛頓は流石に大国の首都なりけり、一足踏み入れて見渡したるのみにて、平和しき眼前の景色、何となく心落着きて、寛闊に、

且都雅(しとやか)に、如何にも心広く体胖(ゆたか)なる、旅としても覚えざりしが、国会前通りに至りては、道路の清らかにして一塵を揚げざる、広場の芝生青々として緑樹の茂り合える、電線は皆地下に敷かれたれば、頭上に蜘蛛の巣を張渡せる鬱陶しさもなく、道広く人少なければ電車自働車の危険もなき、恰も東京の平河町辺、又は星ヶ岡の桜の若葉蔭を行くらん心地もしつ、百三十余年の新国ながらも、平民の担ぎ出せる首長の居る所ながらも、自から国都の気象あるを覚えつ」153

ここで比較されている「東京の平河町辺」とは、現在の東京都千代田区平河町辺りで、江戸時代は大名屋敷などがあった高級地。周囲に官公庁やオフィス街のある閑静な住宅地である。また、「星ヶ岡」とは、現在の東京都千代田区永田町辺りで、近くに国会議事堂や議員会館などもある閑静な場所である。

また、このワシントン滞在中、ホワイトハウスでタフト大統領との会見が実現した(14)。その謁見について天囚は、何十巻の米国史を読むより、深く国柄を理解できたとする。それは、予想していた以上にホワイトハウス内が「無造作」で、儀礼が「簡易卒略」なことであった。そして、これこそ「合衆国の合衆国たる所以」であると説く。

「而して予は此謁見日の光景を目撃して、幾十巻の米国史を読みしよりも、より深く国情を説明せる如きを感じたりき、生平承り及びし国柄、帝王の宮殿に入るが如くなるべしとは勿論思わざりしも、斯く迄に無雑作なるべしとも思い掛けざりしが、思いの外の光景、名こそ大国の大統領閣下なれ、儀礼の簡易卒略なる、依然たる一個平民の会見に異ならず、是れ合衆国の合衆国たる所以なるべし」163

同様の感想は、ワシントン元大統領旧宅の訪問でも記されている。木造の旧宅は質朴でそれほど大きくはないとの感想である。この旧宅前で撮影された集合写真が今も天囚の出身地種子島の西村家に残っている。

「丘陵の上、数棟の白亜ぞ其の故宅なりける、廐(うまや)、厨(くりや)、及び馬車、皆昔を偲ぶ種ならざるなし、木造の故宅樸素にして甚だ大ならず、



ワシントン旧宅前での集合写真

廊下は居間客間の類数室、楼上は寝室にして、華盛頓夫妻卒去の寝台、猶其の旧を存し、其の朋友の投宿せし寝室に至るまで、昔の儘に保存し、手沢の器物、遺愛の琴剣、亦皆其の古（むかし）を物語れる、人をして坐（そぞ）ろに崇仰悽愴の感を禁ぜざらしむ」165

次に、五月九日の夕方に到着したニューヨークでは、その繁華街の夜景に驚いている。特に、電光掲示の看板は目もくらむばかりであったという。そして日本にも、電灯による広告もあるにはあるが、家屋との調和を得ていないと批評する。

「夜景見物がてら市中を徒歩するに、繁華雑踏の光景は、流石に米国第一の都市たるを説明し、層楼高厦の窓々を洩るる火影は、宛然（さながら）全市の電灯飾（イルミネーション）、先ず以て目に注（つ）つきしは、電気応用の広告術にして、店と云う店、屋根と云う屋根には、明滅自在、五彩燦爛、奔馬の足掻を現し、激流、滝津瀬を示し、種々の工夫を凝らしたる、目も眩かんばかりなり、我が邦の電灯広告も、雛形は相似たれど、家屋との調和を得ずして昼間の不細工は改めたきものなり」180

驚いたのは夜景ばかりではない。新聞記者ならではの観察も見られる。それは、セントラルパークでの光景で、「子守女」が、子

の寝ている間に熱心に新聞を読む様であった。そして、アメリカでは車中でも広場でも誰もが新聞を読み、また読み捨ての新聞を回収して養育院などに送る仕組みができているとし、一新聞紙の売り上げが七十～八十万部に達しているのも当然だと記す。

「乳母車を引ける子守女の木蔭に憩いたるが、守る子の寝入りけん間にと、余念なく新聞を読める、我邦には見ぬ図なり、総じて此の国の人は車中にても広場にても、下女も下男も新聞を手にせぬはなし、広場の腰掛（ベンチ）にずらりと休める男女も亦皆新聞を読みつつあり、読棄（よみすて）の古新聞木の葉の落ち散りけんように風に翻りて路に満つ、其の古新聞はやがて掻集めて養育院などに送らるるとぞ、然れば貧富を通じて新聞読まぬ人なしという教育の普及、読書趣味の遍ねき、流石に文明の民なり、一新聞紙の売高七八十万と云える事の我を欺かざるをも知るべし」186

ちなみに、当時の朝日新聞の発行部数は、『朝日新聞社史資料編』によれば、明治四十三年（一九一〇）の大阪朝日新聞が十六万六一〇〇部、東京朝日新聞が十一万一二九二部の計二十七万七三九二部であった。また、ライバル紙の大阪毎日新聞の同年の発行部数は、川上富蔵『毎日新聞販売史』によれば、二十六万二八四五部であった。天囚が地方紙八十万部という売り上げに驚いているのも当然であろう。

これに関連して、「古新聞函」が設置してあることにも注目している。地下鉄の各駅や公園に、やや大きい銭函のような回収箱があり、ここに古新聞を投げ入れ、それが孤児院や慈善病院に送られるという。天囚はそれを「名案」だと評価する。

「地下電車に乗りしが、停車場にて、稍大なる銭函に、読棄の古新聞を投げ入るるあり、此の古新聞は孤児院慈善病院などに回送して貧人に読ましむとぞ、此の紙屑函は公園にも備えたり、名案なり」197

交通については、アメリカでは自動車が多いにもかかわらず、事故が少ないと指摘し、それは交通整理に当たっている巡査の力だけではなく、車夫馬丁がその指示に忠実に従っているからだと指摘する。天囚はここから日本の交通事情を顧みて、しかるべき人までが、巡

査を馬鹿にし、わざとその指示に従わず、万事秩序が乱れがちになっていると嘆いている。

「斯る雑踏の中に、馬車の衝突自働車の転覆もなきは巡査の力なり、四辻の中央に立てる木剣の巡査、唯右手一つを動かすのみにあらで、多数の車の停り且つ馳するは誠に奇しく目覚しき程なり、是れ巡査の力のみにあらで、車夫馬丁の掟を守りて命令に服従するに因るべし、我邦にては車夫馬丁は扨置き、然るべき人迄が、巡査を馬鹿にして、わざと其の命令を聞かぬ振に、群衆の中を駆抜ける程なれば、万事秩序の乱れ勝なる、いといと慨かわし」189

また、デパートでは、エスカレーターに驚いている。当時の日本のデパートにはまだなかったエスカレーターを、「ケーブルカーのように動く梯段」と紹介する。日本で初めてエスカレーターが登場したのは、大正三年（一九一四）、東京の上野公園を主会場として開催された「東京大正博覧会」においてであったから、天囚が驚くのも無理はない。

「此の雑貨店は処々に昇降機ありて何階に上がるも自由なる上に、梯段はケーブルカーの如く動きて、立ちたるままの客を楼上に運び、客をして行歩に労せざらしむ、此設備は高架線の乗降に用いたるもありき」197

大阪にも是非ほしい設備として天囚があげるのは、水上消防船であった。ハドソン川で水上消防船の放水の様子を視察した天囚は、その威力に驚嘆し、大阪消防署にも備えたいものだと述べる。

「前部の噴水機より水を注ぐを見るに、砲火の力も斯くやと思う迄に猛烈にして、其の落つる所いと遠し、水先は能く煉瓦壁を打砕くとなん、此の船にして我が大阪消防署に在らしめけんには、堂島河岸は烏有に帰せしめざりけん、大阪大火後、水上署に消防船を備うべしとの議起りしが、実行如何にや、横堀をも通行すべき小形の防火船こそ必要ならめ」209

ここに言う「大阪大火」とは、明治四十二年（一九〇九）七月三十一日から八月一日にかけて大阪市北（キタ）で発生した大火であり、「北の大火」または「天満焼け」と呼ばれる。明治期大阪における最大の火災であった。大阪市北区松ヶ枝町に住んでいた天囚は、この大火を体験しているので、水上消防船の必要を痛感したのであろう。

こうしてアメリカの視察を終えた一行は、大西洋を渡ってイギリスに向かった。五月二十二日から六月三日までの十三日間、ロンドンに滞在している。ロンドン滞在が十三日に及んだのは、前述の通り、日英博覧会の視察を含むからであった。

アメリカでは、その新興国としての近代文明に感嘆した天囚であったが、次に訪れたイギリスでは、一転してその歴史と文化と伝統に賞賛を送っている。

まず、セント・ポール大聖堂では、国家の英雄を顕彰している様を見て、日本もその気風に習いたいと述べる。

「英国は実にネルソンありて海上の覇権を握り、ウェルリントンありて武威を欧州に輝かせり、其の二雄を表彰して、崇仰追慕すること、米国に於けるワシントン、リンコルンと同じ、予輩は米国に入りて華林両雄の像と画を到る処に見たり、今は英国に入りて到る処にネルソン、ウェルリントンの像と画とを見んとす、我が邦も亦其の人を選びて此の風に倣わざる可からず」258

ここに言う「ネルソン」とは、アメリカ独立戦争、ナポレオン戦争などで活躍したイギリス海軍提督（Horatio Nelson）（一七五八～一八〇五）であり、イギリス最大の英雄とされる。また、「ウェルリントン」は、初代ウェリントン公爵アーサー・ウェルズリー（Arthur Wellesley）（一七六九～一八五二）。イギリスの軍人、政治家で、一八一五年、ワーテルローの戦いでナポレオンを破った。一方、「華林両雄」と併記されたのは、アメリカのワシントンとリンカーンである。リンカーンは、アメリカの初代大統領ジョージ・ワシントン（George Washington）（一七三二～一七九九）。リンカーンは、第十六代合衆国大統領エイブラハム・リンカーン（Abraham Lincoln）（一八〇九～一八六五）。

また、英国博物館（大英博物館）では、勇壮な戦士の像に平和の根源を見る。但し、裸体の女性像については、性欲主義に出る醜態で、日本には流行らせてはならないと釘を刺す。

「此の頃の古き画又は彫刻を見るに、裸体の女人像は、陰部を露出せるもの少く、男子は皆陽物を露出せり、蓋し古代の欧州は男尊女卑にして、陽物崇拝の風ありけん、誠に斯くあるべきことなり、男は陽女は陰、夫は天婦は地などの儒教主義は扨置き、陽物を露出せる戦士の像は勇壮なる、平和の根源此に在りと覚ゆ、女の裸体像に陰部を掩わざるは、後世性慾主義に出でし醜体、日本には流行(はや)らせまじき事ぞかし」263

次に、英国一の名門とされるイートン校を訪問し、その「古い」ことに感慨を寄せている。図書館に配架されている書物が「韋編三たび絶え」たる様子であるという。これは言うまでもなく、『史記』孔子世家に記された孔子の故事で、晩年に『易』を好んだ孔子はそれを何度も読み返し、竹簡を綴じているひも（韋編）がしばしば切れたと伝えられる。天囚は、この故事を織り込みつつ、イートン校の図書の様子を記す。また、椅子・机、さらには壁や柱に刻まれた落書きを、腕白盛りの少年たちの微笑ましい遊戯として紹介する。

「次に図書館を観る、架上の古書韋編三たび絶えけんと覚しき迄に古(ふ)りたり、次に古来の教場を見る、聞きしにまさりて質朴なる木造の矮屋に古机古椅子、壁と云わず、柱と云わず、凡そ有りと有らゆる木材には、四百年来の落書、小刀(ナイフ)もて人名を刻みたる、腕白盛りの少年の遊戯、面白しともをかしくとも云うばかりなし」279

六月四日、一行は、ドーヴァー海峡を渡ってフランスに向かった。五日～八日まで四日間パリに滞在した。なお、『欧米遊覧記』では、ベルサイユ宮殿、ルーヴル美術館などについて記したパリの紀行文も興味深いが、ここは天囚の担当ではなく、同じく特派員として参加した朝日新聞社の佐藤真一（号は北江）（一八六八～一九一四）によるので、本稿では割愛する。

ちなみに、『欧米遊覧記』はほとんど天囚の手になるので、「西村天囚著」とされているが、実は特派員の共同執筆であり、天囚担当以外では、佐藤北江が、ハワイに向かう船中での運動会、同胞のハワイ耕地、シカゴ、ナイヤガラの滝（下）、ニューヨークからロンドンに向かう大西洋上、ベルリンなどを担当し、岡野養之助（号は告天子）（一八七八～一九四九）が、シカゴにおける会員の自由行動、ナポリ、ヴェスヴィアス火山、ロシア帝国の首都サンクトペテルブルク、モスクワなどを担当している。また、日英博覧会については、大

阪朝日新聞社から取材員として別途特派された長谷川如是閑が「日英博覧会記」を執筆し、それが本書の附録の一つとして掲載されている。

さて、フランスからイタリアに入った天囚は、丘陵の多いジェノヴァの様子を、長崎に似ていると記す。また、市営墓地の規模が壮大であることに思いを寄せ、墓に金を惜しまぬ風土であると説く。

「長崎に似たる地形にて、人家は丘陵に拠り、螺旋式の道路は巧みに馬車電車を往来せしむ、家々の壁を彩り且画きたるこそ伊太利風なんめれ、寺はサン、ローレンス寺いと古し、カンボサントという市営墓地は規模甚だ大にして、大理石のいと広く且長き殿堂廻廊中に、無数の石棺石像あり、墓に金を惜まぬ土俗にして、墓石の支度に一生働らきて金を蓄うるもありとぞ、墓の前には花を手向けたるもの多し、以て土俗を知るべし」324

また、六月十九日、ヴェニスでは、十二艘のゴンドラ船に分乗して運河を巡り、その水路としての便利さを痛感して、大阪でもこうした水路を利用すべきだと指摘する。大阪は水の都と言われ、市内を縦横に水路が通っているにもかかわらず、交通路としては活用されていなかった。それゆえ、狭い陸上道路でしばしば人力車同士の衝突が起こるというのである。また、水辺の家屋が綺麗であるのを目にし、これは美術に秀でた国柄だからだと評価する。

「午後は十二艘のゴンドラ船を雇いて、一同乗組て、大小運河を見巡る、運河とは云え、河水を引きて往来を為せるなり、水さして不潔ならず、両岸の家々は直に運河に臨みて、表門を開けるもあり、裏口を開けるもあり、其のさま稍我が大阪と相似たれど、岸はいと低く、満潮には門前の石段二つばかりを余すのみ、大運河の広き処は、堂島川に似て、狭き処は東横堀より広からじ、横町の小運河に到りては、江戸堀よりも狭し、河は即ち道路にして、彼のゴンドラは車の代用なり、然れば陸上には一輛の車なく、一頭の馬なし、陸上も亦路なきに非ずして、河上に多く石橋を架したるが、橋下は半円形にして舟行に便にせり、大阪も斯く水路を利用したらんには、いと狭苦しき道路に、人力車の衝突も少なからんを、河底浅淤、巡航船すら難儀するこそ惜けれ、扨大阪に似たりとは云

え、此処の家屋は海中の楼閣、すべて綺麗にして都雅なるは、美術に長ずる国柄なればなるべし」370

次に六月二十三日、一行はドイツのマインツに到着する。天囚がマインツにひときわ感動したのは、そこが、活版印刷の発明者とされるヨハネス・グーテンベルクの出身地だからである。記念館に二十五万冊もの図書が保管されていて、さらに書庫改築の計画もあるという。先賢の遺功を表彰することに努めている様子に天囚は深く感嘆した。そして、日本には、中国・朝鮮の木活字や銅活字がもたらされていたにもかかわらず、印刷業はそれほど振るわず、ようやく近代ヨーロッパから印刷技術が導入されて以降、今日のように盛んになったが、それは、このグーテンベルクの遺沢であるという。

「マインツは天下に誇るべき一洪宝あり、活版印刷の祖なるグッテンベルヒは本地の人にして其の事業は本地に創始せられたること是れなり、然れば館中別に記念室を開きて、グッテンベルヒに関係せる印刷物を所蔵せり、……其の記念室に蔵する所二十五万冊、近時書庫改築の設計ありという、先賢の偉功を表彰するに力を尽すこと如此く殷んなるは、誠に感歎に堪えたり、グッテンベルヒの印刷創始は、実に一四五〇年にして、我が邦は足利氏の盛時なり、支那朝鮮の木活銅活や古し、我も夙に之を彼より伝えしも其業振わず、遂に欧羅巴文明の東漸に因て、今日の盛を見しは、亦グッテンベルヒの遺沢と謂う可し」397

このように天囚は、欧米諸国の遊覧により、その町並、設備、文化に深く感動した。そしてこれらはそのまま鏡となり、当時の日本を照らすこととなった。欧米諸国の人々、そして先進的な文物を前にすると、どうしても日本の劣っている点が目についた。日清・日露戦争に勝利して世界の列強に仲間入りしたとはいえ、本当に日本は文明国なのかと、天囚は自身に問いかけざるをえなかった。

四　「日本」の再発見

しかし、この旅は、天囚たちに劣等感を抱かせ続けたわけではない。欧米遊覧を通して、逆に日本の良いところを再発見することにも

なった。

まず、最初の寄港地ホノルルでは、現地で奮闘する移民に触れている。明治元年（一八六八）に官約移民（政府間の協約による移民）として始まったハワイへの移住は、明治時代の中頃には移民会社の取り扱いによる私約移民へと移行しつつ徐々に増加し、明治三十五年（一九〇二）頃には、サトウキビ労働者の七割が日本人移民で占められるようになったとされる。しかし、一九〇〇年にハワイがアメリカに併合され、移民制限が起こった。一九〇八年の日米紳士協約などにより日系の移民会社はなくなった(15)。第二回世界一周会は、こうした状況の中でホノルルを訪問したのである。当時、ハワイ全体では、移民七万二～三千人、ホノルルだけで一万二～三千人に及んでいたという。

「上野総領事の談話に拠れば、現今在留民総数七万二三千にして、ホノルルに在る者又一万二三千に及び、砂糖業に従事する者三万人にして、邦人設立の小学総数八十四校、米国学校に入る者を合せて、就学児童六千五六百に上るとぞ、又之を他の人に聞きしに、在留民中、元年者と称する者あり、此れは明治元年より移住し居る者なり邦人移住の起原や久しく、根柢や深し」42

また、アメリカ大陸では、四月二十七日、シカゴに到着、その後二日間滞在しているが、天囚は、その上水道事情に触れている。市内では湖水から水を引き、黴菌（ばいきん）がいないとして濾過しないため、水質が非常に悪いと指摘する。そしてこの点においては、東京・大阪の方が上であると自賛する。

「北の方遙に転じて今度は上水工場を見る、湖水の八哩（マイル）沖より取入るるものにして、一日の使用量六十億ガロン、黴菌なしとて濾（こ）さず、左（さ）ればこそシカゴ水道の水の悪しき事や、白水の如くにしてコップに入れても全く透き通らぬなり、飲用水は各自の家にて濾し、氷を入れて用う、此の点に於て我東京大阪は遙（はるか）にシカゴ以上なり」113

五月七日・八日の両日滞在したワシントンでは、ワシントン記念塔を訪問した。エレベーターで塔に上る途中、運転手に導かれて傍ら

に目をやると、日本からもたらされた石があった。そこには、「嘉永甲寅のとし五月伊豆の国下田より出す」と行書で記されていた。天囚は、指折り数えて、それが五十六年前の嘉永七年（同年改元して安政元年、一八五四年）に当たることを確認し、東インド艦隊司令長官ペリー（Matthew Calbraith Perry）（一七九四～一八五八）が再来して日米和親条約を締結した年であることに気づく。そして、この石はペリーが日本から持ち帰ったものに違いなく、日米親交の記念、海外における維新記念碑だと説く。天囚は、意外なところで日本の外交史を発見したのである。

「仰ぎ見れば天半に屹然たり、昇降機にて五百尺の処迄登る、二百尺の中途にて運転手は昇降機を留め、日本より齎したる石ありと指示せり、見れば石面に行書にて、「嘉永甲寅のとし五月伊豆の国下田より出す」と記せる文字明白（ありあり）と読まる、指折れば今より五十六年の甲寅は嘉永七年、此の年改元、安政元年にしてコンモドル彼理（ペルリ）再渡の年なり、必定是れ彼理の齎し帰る所にして、此石独り日米の親交を記念するのみならず、海外に於ける維新記念碑とも謂うべし」167

五月九日に到着したニューヨークでは、その夜、市内八十五丁目にあった日本倶楽部を訪問した。思いがけず、日本風の畳の部屋があったことに感動し、また、外国における同胞の活躍に心を強くしている。

「此の室全然日本式にして一間半の床の間に一間の違棚、畳さえ敷きたる、斯る天涯（ところ）にて斯る国風の筵に坐せんとは思いも掛けず、斯る設備あるを見ても、此の地に於ける同胞の発達と、地位勢力の根拠あるを知られて、いと頼もし」182

また、イギリスに渡った後、天囚は、アメリカとイギリスの国柄を比較して、アメリカは新進文明国としての旺盛な活動が特徴であるのに対し、イギリスは歴史尊重、国粋保存の国柄であると述べる。そして、「二千五百七十年」[16]の歴史を有する「神州」すなわち日本のありがたさを感ずるのである。

「米国にては日に日に新なる事物を見て活動邁往の気象に触れ、忽ち大洋を越えて英国に入るや歴史尊重、国粋保存の風に鑑みて、益々二千五百七十年の神州の有難きをも知れり、如何に古きがよければとて、停滞踟躊して世界の進運に伴わざれば、或は人後に落ちなんことを恐れて、更に米国の遊踪を回想し来れば、米国にて気附かざりし長処の、却て今日に其よと知らるるものあるべし」281

歴史の都ローマでも、この感は一層募った。史跡や古寺を訪れ、天囚はその歴史を賞賛するが、一方で、日本の文化の質朴さを再発見している。天囚が「羅馬の本願寺」と記すのは、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂である。天囚は、その歴史を回顧しつつ、金に物を言わせて天下の名工を集め、長い歳月をかけて建築したものなので、荘厳ではあるが、自分の目には俗悪に映ると述べる。そして、ロンドンのウェストミンスター寺院の古朴さには及ばず、さらに日本の法隆寺などとは比べものにならないと批評する。

「此の羅馬の本願寺はグレゴリオ大僧正が紀元五百九十年に法王第一世として羅馬に占拠してより、威権王法を圧しつつ欧州の君主をして足址を舐めしむること一千年、愚帝愚王愚夫愚婦の財布を絞り、天下の名工を集め、歳月の久しきを積みて建立せし大伽藍なれば、其の荘厳侈麗を窮極せしも亦怪しむに足らず、然れど我等の目には俗悪にして倫敦のウエストミンスター寺の古朴愛すべきに若かず、況や我が法隆寺なんどに比ぶべくもなきをや」336

また、ローマ法王宮図書館でも、再び日本の歴史と出会うこととなった。それは、天正十年（一五八二年）に大友宗麟ら九州のキリシタン大名がローマへ派遣した「天正遣欧使節」の足跡であった。案内人によれば、図書館の中の壁画は、ローマ入りした使節を歓迎する情景を描いたものであるという。天囚は、これを「日本最初の洋行」「日本外交史の異彩」であると説く。

「再び彼の扉を開きて図書館に案内せしが振返りて扉の上なる壁画を指示しつつ、此は最初の日本使節の羅馬入の光景にして、中央なる三人の騎馬紳士こそ其の人なれという、……是れ蓋し天正十年豊後の大友宗麟が特派せし使節なんめり、……羅馬に入りしは翌一五八五年の三月廿日にして、此の壁画は実に当日歓迎の状を図したる者ならん、是れ日本最初の洋行にして、西海諸侯の内使に過

ぎざるも、亦日本外交史の異彩たり」344

さらに天囚の発見は続く。伊達政宗の書状二通であった。これは、江戸時代の仙台藩主伊達政宗が家臣支倉常長らを派遣した「慶長遣欧使節」に持たせたものである。支倉がローマ教皇パウルス五世に謁見したのは、元和元年（一六一五）九月十二日。天囚は、その使節にゆかりのある書状を実見し、感慨にふけった。支倉らの「慶長遣欧使節」は、「天正遣欧使節」と同じく、八年の歳月を費やす大旅行であった。天囚らの世界一周会も百日を超えるものではあったが、天囚は、それら使節団の労苦が偲ばれると記す。

「更に長廊の中央なる案上の一函を開けば、金蒔絵の文函あり、……其の中に蔵するは、伊達政宗の文書二通にして、……」344

「支倉の帰朝は、元和六年八月二十六日にして、大友使節と同じく八年を費せり、我等一行が僅々百日を以て世界を一周するに視れば、労逸果して如何ぞや」346

一方、欧州人がはじめて日本に足跡を残したのは、天文十二年（一五四三）であった。ポルトガル人が種子島に漂着し、火縄銃が伝えられた年である。種子島は天囚の出身地。天囚は、日欧交流史に思いを馳せたのであろう。種子島の南端の門倉（かどくら）岬には、大正十一年（一九二二）に天囚が撰文した「鉄砲伝来紀功碑」が立っている。

「顧うに欧州人の始めて足跡を我邦に印せしは、天文十二年（一五四三年）葡人種子島に来りて鉄砲を伝えし時に在り、後三十九年にして大友使節の渡欧を見る、是を邦人渡欧の始めと為す、後ち三十一年目に伊達政宗の使節と為れり、二者共に名を西教信仰に託して貿易の利を収めんとせしに似たり」346

このように、天囚は、欧米各国を遊覧して、その先進性に感嘆するとともに、一方では、古き良き日本を再発見している。日本の歴史と文化は海外で光を放っていた。

五　成功の要因とその後の世界一周会

明治四十三年（一九一〇）七月十八日、百四日間の旅を終えて、第二回世界一周会は敦賀に帰着した。一人の落伍者もなく、一つの事故もなく、旅行団は無事帰国したのである。世界一周旅行が成功したのは何故なのか。その要因を天囚は二つあげている。

一つは、季節の選択が良かったことである。春から初夏にかけてという季節は一年の中でも最も旅行に適した穏やかな時節であった。しかも、この年（一九一〇）は欧州に雨が多く、猛暑が懸念されていたイタリアやシベリヤなども比較的涼しかったことである。この気象条件が第一の要因であった。

そして、天囚は、何より会員諸氏の良識がこの成功を導いたと評価する。団体行動では往々にして自分勝手な行動に出たり、参加者同士の衝突が起こったりしがちになるが、皆が節制を保ち、自重自愛の観念に富んでいたと指摘する。無事の帰国はこのようにして達成された。

「而して我社が一周会員諸君の帰朝を迎えて、先ず成功を誇るは、五十余人の一行の無事に大旅行を終りしことなり、今日の洋行物の数ならざるに似たれど、僅々一百日に二万幾千里を踏破して、八箇国の事物を視察するは容易の業に非ず、風土気象食物も、処変（ところ）れば品変りて、旅の空に病人を出さば、旅程の困難言うばかりなかりしを、斯く打揃うて無事に帰朝せしこそめでたしともめでたけれ、是れ一には我社の旅行季節の選定宜しきを得たりしと、二には今年は欧州も雨多く、伊太利、西比利亜等定めて熱かるべしと予想されし所の涼しかりしにも因れど、会員諸君が皆節制ある紳士にして、自重自愛の観念に富みたりし結果に因らずんばあらず、扨もめでたき旅行なりしよ」497

また、帰国翌日の七月十九日付け朝日新聞に掲載された「一周会解散式」には、一周会会員による感謝文の要旨全五条が掲載されている。これは、ウラジオストックを大阪商船鳳山丸で出港した後、全員の賛成を得て決議したものであるという。それによれば、第一に、この計画が国家の現況に対して時宜を得たものであったとされている。これは、前述の世界情勢に鑑みて、日本の民間人が世界を知り、

また世界もこの一周会を通じて日本を知る絶好の機会になったということであろう。また、旅行中の斡旋が行き届いていたこと、すなわち旅行代理店トーマス・クック社が充分な支援を行ったことも高く評価されている。

「鳳山丸の浦塩発の後一周会員全部の賛成を得て決議したる感謝文（の要旨）あり、……

一、本会の計画は国家の現況に対し時宜を得たるものたりし事
二、外交に対する吾人の希望に好機会を与えたる事
三、旅行の期節の選択宜しきを得たる事
四、旅行中斡旋極めて行届ける事
五、尚将来に於ても此の種の計画を企画せられん事を望む事」500

さらに、第一回世界一周会との比較を通じても、その成功の要因を指摘することができよう。そこで改めて第一回と第二回の概要を比較してみる。

まず、企画については、第一回の発案者は東京朝日新聞社の杉村楚人冠。第二回の企画は、この第一回を概ね踏襲した。なお、朝日新聞社は明治三十九年（一九〇六）にも満韓巡遊の旅（朝日新聞満韓巡遊船）を企画、三七八名が参加して成功を収めている。日清、日露戦争の戦跡巡りではあったが、これも世界一周会の前例に準ずるものの一つとして見逃せない。(17)

次に日程は、第一回は明治四十一年（一九〇八）三月十八日～六月十五日の九十六日間。第二回は明治四十三年（一九一〇）四月六日～七月十八日の百四日間。第二回の方が八日ほど多くなっているが、約百日という規模は同様である。

また、会費は第一回が当初発表二一〇〇円、最終的には二三四〇円、第二回は当初発表が一九五〇円、最終的には二四五〇円。ちなみに、明治四十二年（一九〇九）トーマス・クック社が主催した世界一周旅行は朝日新聞社主催第一回世界一周会より二週間長く会費は三二五〇円と高額であった。

会員数は第一回は五十六名（特派員の杉村楚人冠と土屋大夢を含む）。第二回は、西村天囚ら特派員五名を含め五十七名。これもほぼ

同規模である。会員の内訳も、東京・大阪を中心に全国にわたり、代議士、企業の社長・重役、画家、学生など第一線で活躍している様々な分野の人から選ばれているというのも同様である。但し、第一回には女性三名の参加があり、和服姿が海外で好評だったとされるが、第二回の参加者はすべて男性であった。

滞在地もほぼ同様であるが、第一回のみにあるものとしてソルトレーク、第二回のみにあるものとしては、スイスのルツェルン湖、ドイツのマインツ、ライン河下り、ケルンである。その他、主要都市については、ほぼ同じである。

このように、第二回世界一周会は、第一回をほぼ踏襲するものであったことがわかる。第二回だからといって、訪問地を一新するというような冒険はしなかったのである。前例にほぼ倣ったことが旅の成功につながったと言えよう。また、参加者も、第一回世界一周会が無事帰国したという実績に安心して応募したということもあろう。天囚はその点について、旅の冒頭で指摘している。第一回世界一周の成功が世間の人々の旅行欲をかき立て、第二回の応募者が予想以上に多かったという。

「世界は縮まれり、人工天に勝ち、船と車とはいや大きくいや開けつつ、如何なる大海も高山も、縦貫横断、意の如くならざるなく、米欧亜の連絡周観は、昔時国々より、江戸への参勤交代に比して、より多き日数を費ず、さしも億劫なりし洋行ちうものも、隣村の盆踊観に行くらんの容易さは、文明日進の賜、又一つには我が社の率先主催したりし第一回世界一周の成功が、世人の旅行慾を誘導せしにも因らずんばあらじ、されば此の第二回の世界一周にも応募意外に多く、選りに選りたる紳士五十二人に社員五人を加え、総勢五十七人の一団を組織し得たるは、先ず以て本社の光栄、同行社員の面目なり」1

もっとも、明治時代の終わり頃には、世界一周とまでは言わなくても、民間団体が海外渡航する機会は増えつつあった。例えば、明治四十二年（一九〇九）八月には、渋沢栄一を団長とする全国実業団が、アメリカ太平洋沿岸連合商業会議所の招待で渡米し、約三ヶ月間で五十三都市を訪問している。こうしたことも、第二回成功の背景として重要であろう。

では、第二回世界一周会は、第一回を踏襲したまでであり、特に第二回としての意義はなかったのだろうか。確かに、第二回は、第一回の旅程を参考にし、トーマス・クック社の手配によって、万全を期したと言えよう。ただ、第一回から二年後の企画であり、参加者は

ほぼ総入れ替えとなっている。特派員の内、土屋大夢（元作）は第一回に続いて二度目の参加だったとは言え、西村天囚は初の欧米渡航であった。朝日新聞社としては第二回であっても、参加者にとっては第一回と言ってもよい旅であった。そして、何より、漢学者西村天囚が、その新鮮な感性と達意の名文で紀行を寄せたことが大きな意味を持っていた。天囚は、新聞記者として冷静に諸外国を紹介するとともに、その鋭い観察眼で外国の優れたところ、そして当時の日本人が忘れかけようとしていた日本の良さを読者に伝えたのである。

また、第二回世界一周会の目玉として、日英博覧会の観覧があった。ロンドンには十三日滞在している。これは第一回世界一周会にはなかったことであり、参加者にとっても、また新聞の読者にとっても、大いに新鮮な知見となったであろう。(18)

さらに、日露戦争後、緊張関係にあったアメリカではタフト大統領との会見が実現し、ロシアでは、首都サンクトペテルブルクの新聞社を訪問して、反日感情が和らぎつつあることを実感した。

ロシアの新聞社での様子は『欧米遊覧記』に次のように記されている（この項は岡野告天子の担当）。この新聞は、日露戦争前後、日本に対して厳しい論調の記事を掲載していたが、近年ロシア国民一般が日本に対して好感を抱くにつれ、同紙の論調も、著しく親日に傾いてきたという。

> 「午後会員一同車を連ねてノヴォエウレミヤ新聞を訪問す、同新聞は世に名高い半官報で日露戦争前から既に久しく我が国に知られた新聞である、戦争後も引続いて余り日本を好く云わなかったが、近来露国一般が日本に対して好感を抱くに連れ、又近く日露協約も行われんとするに際し、同紙の論調著しく親日に傾いて来たという事だ、是は日露両国の為に結構な事だから、将来の国交の為とて、我が一周会員は大使館の上田君の紹介を頼んで、同社の社長スオーリン翁及び政治部長エゴローフ氏と会し、且新聞社を一覧することとなった」457

ここに言う「ノヴォエウレミヤ新聞」とは、一八六〇年代に次々と創刊された新聞の一つ「新時代」（ノーヴォエ・ヴレーミヤ）で、一八六八年～一九一七年まで刊行された。(19)「半官報」とは、政府の機関紙で、半分は官報のようなものという意味であるが、その半官報であっても、日本に対する論調が和らいできたというのである。

このように、日本近代の外交史という点でも、この第二回世界一周会は大きな意味を持っていたと言えよう。

それでは、朝日新聞社は「第三回」の世界一周会を企画したのだろうか。先に紹介した第二回世界一周会員による感謝文の第五条には、「将来においてもこの種の計画が企画されるのを希望する」旨が記されていた。

また、第二回に続き、第三回以降が待望されていたことが、天囚の『欧米遊覧記』からも読み取れる。

五月九日、ニューヨークの日本倶楽部を訪問した一行は、その会長から歓迎の挨拶を受けた。その挨拶の中で、ニューヨーク在留の邦人は、この第二回旅行団が来訪するのを首を長くして待っていたこと、そして、今後も毎年この会が催されるのを期待する旨が述べられている。もちろん、社交辞令なので、多少割り引いて考えなければならないが、現地で活躍する邦人にとっても、この世界一周会は頼もしい存在であったのだろう。

「やがて会長高峰博士は、公爵及び我が一行を楼下の一室に請じ、先ず起ちて口を開き、明治の昌運が徳川氏三百年の文化に淵源するを述べて公爵の来遊を歓迎し、更に壁間に掛くる所の朝日新聞の社旗を指し、此は一昨年第一回世界一周会の置土産なるが、在紐育の邦人は第二回団体の来遊を待つこと久しかりしに、今や多数紳士を迎接するは愉快なり、今後も年々歳々本会を催されたしとて、深厚なる歓迎の情を表せり」182

このように、会員からも、海外在留邦人からも継続が期待されていた世界一周会ではあったが、何故か朝日新聞社は第三回を実施しなかった。その理由について、小林健『日本初の海外観光旅行』は、こう指摘する。もともとこの世界一周会は、購読者拡大を狙った読者サービス、メディアイベントという性格があり、第二回までで、その当初の目的は充分に達成された。また、時代は船から航空機へと移りつつあり、朝日新聞社自体が、航空イベントを重視するようになった、と。

この推測は概ね妥当であろう。朝日新聞社の主催した世界一周会は、第一回、第二回とも、トーマス・クック社主催の世界旅行に比べて、かなり安価であった。朝日新聞社は、この旅行で格別の利益を得たいと思っていたわけではない。文化的活動による新聞社の宣伝という意味合いが確かに大きく、それが充分な成功を収めた以上、さらに回を重ねる必然性は薄かったと思われる。

ただ、第三回以降が実施されなかった要因としては、より重要なものとして、その後の世界情勢にも注目しておく必要があろう。第二回世界一周会が帰国したのは、明治四十三年（一九一〇）七月十八日であった。第一回（一九〇八）との間隔を考慮すれば、第三回は一九一二年頃に実施されてもよさそうなものであった。しかし、一九一二〜一九一三年には、「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれていたバルカンとオスマン帝国との間で第一次バルカン戦争が勃発し、一九一三年六月には、ブルガリアがセルビアとギリシャを攻撃して第二次バルカン戦争が勃発した。ヨーロッパの情勢は極めて不安定となっていった。さらに、一九一四年六月二十八日、サラエボ事件が発生、遂に七月二十八日、第一次世界大戦が始まったのである。アメリカも連合国側として途中から参戦した。

この時期のヨーロッパを舞台とする大きな催し物としてオリンピックを例にあげれば、一九一二年のストックホルム大会は開催されたものの、一九一六年に開催予定であったベルリン大会は第一次世界大戦のため中止となっている。大戦が終結し、ヴェルサイユ条約が締結されたのは、一九一九年六月二十八日であった。

このように、欧米の情勢は、その後、日本の民間人旅行団を安易に受け入れるような環境にはなかったと言えよう。朝日新聞社としては、そのような中、大きなリスクを冒してまで、欧米遊覧を継続する必然性が失われたのではなかろうか。(20)

天囚にとって、世界一周の旅はこの時が最初で最後となったのである。

六　漢学者と西洋近代文明

では、ここで標題に立ち返り、「漢学者」としての天囚が当時の「世界」とどう向き合ったのか、という点について改めて考えてみよう。

漢学者とは、中国の古典「漢籍」を教学する者であり、基本的には保守的な性格を有する人と言えよう。伝統的な文化や道徳を尊重し、それを後世に伝えていこうとする使命感を抱く者と言っても良い。新奇なものを安直に信奉する軽薄な人物ではない。


「懐古」印

郷里の種子島に伝わる天囚旧蔵の印の中には、「懐古」と刻んだものが見られる。天囚の姿勢を端的に示しているであろう。江戸時代の大坂学問所「懐徳堂」の復興に奔走したのも、そうした意識の表れの一つと理解

される。

こうした伝統重視、懐古の立場の漢学者が先進的文明と対峙した時、一般論として、まず次のような反応が予想される。それは、生理的な嫌悪感である。古き良きものを壊すところに成立する近代文明は到底受容できないという感覚である。また、そこに国粋主義的な思想が加われば、西洋の人や物を排除しようとする「排外」の姿勢となるであろう。

その参考の一つとして、江戸時代の末期、懐徳堂最後の教授並河寒泉（一七九七～一八七九）がロシアの軍艦ディアナ号と対峙した時の言動を確認してみよう。(21)

安政元年（一八五四）九月十八日、ロシアの海軍中将プチャーチン率いる軍艦ディアナ号が大坂湾安治川の河口、天保山沖に現れた。何の予告も受けていなかった大坂は大混乱に陥り、大坂城代、両町奉行はその対応に追われた。外国通詞が常設されていない大坂の地で、頼るべき知的拠点は懐徳堂であった。そこで並河寒泉は「応接史官」を命ぜられ、懐徳堂の授業を休講にして天保山近くの詰所に出張したという。九月十八日のディアナ号出現から約二十日間、寒泉は対応に追われ、その間、文書を介した間接的な交渉、船上での漢文筆談による直接交渉も行った。

その間の記録は並河寒泉自身が『拝恩志喜』としてまとめている。それによれば、寒泉はかなり激烈な言葉でロシア側を批判しており、相当な敵意・蔑視を持って交渉に臨んでいたことが分かる。その後、いわゆる安政の大地震・大津波によってディアナ号が大破・沈没したとの報に接した寒泉は、「痛快」とまで言っている。要するに、ロシア軍艦は、神聖なる「皇国」を侵犯した夷狄であり、寒泉には到底許すことのできない対象であった。そして、自らの筆談交渉の成果により、ロシア軍艦を大坂湾から退去させたことを、栄えある攘夷の実践であったと自己評価するのである。

これはかなり特殊な事例かもしれないが、一方で、江戸時代末期の漢学者の思いを端的に表明しているとも言えよう。これに比べれば、同じく漢学者とは言っても、西村天囚の姿勢は全く異なると評価できる。中国古典を尊重しつつも、西洋近代文明に謙虚に接し、その良い点は高く評価し、また日本の良さも再発見している。懐古に固執することのない冷静な観察眼があったと言えよう。

もちろん、寒泉と天囚には、約七十年の時代の差があり、その間には、明治維新という決定的な出来事があった。こうした差違が生じるのは当然であろう。

ただ、この差を単なる時代の差として処理はできないようにも思われる。西村天囚という漢学者は、同時に朝日新聞の記者・主筆でもあり、ジャーナリストとしての一面をも備えていたからである。頑迷な懐古の立場ではなかったことが、こうした柔軟な観察を生んだと言ってよかろう。

またそもそも、天囚は郷里種子島を出て、東京大学に新設された古典講習科に学んだ後、大阪朝日に入社した。進取の精神があったと言えよう。出身地の種子島は、鉄砲伝来の地であったが、漂着した船員たちと漢文による筆談交渉をしたのは、天囚十三代前の先祖に当たる西村織部丞時貫（おりべのじょうときつら）であった。時貫は、島の南端門倉岬に漂着した異人たちを排除することなく、島の北部の赤尾木（あかおぎ）（現在の西之表）に誘導し、種子島氏第十四代島主との対面を実現させた。これが日本史上の大事件「鉄砲伝来」につながったのである。[22] その祖先からして開明的な家柄であったとも言えよう。

そして、今ひとつ留意しなければならないのは、アジアへの視線である。これも一般論として、先進的文明に敬慕を抱く余り、いわゆる西洋びいきとなったり、日本以外のアジアを遅れた地として蔑視したりする人々もいたであろう。[23]

これについては、この世界一周会が欧米巡遊の旅であり、中国・インド・東南アジアなどに立ち寄っていないため、天囚のアジアに対する視線を直接確認することはできない。しかしながら、明治時代の後半、計三度にわたって渡清し、現地の政治家や文人たちと親しく交流した天囚には、少なくとも蔑視の感情はなかったと推測される。[24] アジアの古びた衣をすっかり脱ぎ捨てるという「脱亜論」のような立場になかったことは明らかである。西洋近代文明と向き合った「漢学者」西村天囚は、歴史と文化を尊重しつつも柔軟かつ冷静な態度を取ったと言えるのではなかろうか。

結語

以上、本稿では、朝日新聞社主催第二回世界一周会を追いながら、明治時代末期の漢学者西村天囚が見た「世界」とは何だったのかについて考えてきた。天囚は、欧米の先進的文化に素直に驚き、また憧れを抱いた。しかしその一方で、冷静な観察眼により、日本の歴史や文化を「再発見」した。懐古と開明の程よいバランスがとれていたと言えよう。



再建された懐徳堂（重建懐徳堂）

では、大阪の漢学者としての西村天囚自身にとって、この世界一周会はどのような意味を持っていたのであろうか。

天囚は、朝日新聞の連載「懐徳堂研究」を一旦中断して、この旅行に参加した。帰国後、連載は再開され、後に『懐徳堂考』としてまとめられた。そして、翌年（一九一一）十月五日、江戸時代の懐徳堂教授たちを追悼する師儒公祭（懐徳堂記念祭）が大阪で挙行され、懐徳堂の復興運動が本格的に始まった。大正五年（一九一六）には、重建懐徳堂が大阪市内に竣工し、天囚はその教壇に立つこととなったのである。この一連の懐徳堂復興運動に、天囚の世界一周会参加の体験が少なからぬ影響を与えたことが推測される。特に、現地で見た教育や新聞の普及、図書館の充実、先人の顕彰などは、大阪の地に懐徳堂を再建したいという天囚の願いを強く後押ししたことであろう。

注

（1）懐徳堂と西村天囚に関する基礎的な情報については、湯浅邦弘編著『増補改訂版懐徳堂事典』（大阪大学出版会、二〇一六年）、竹田健二『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興―』（大阪大学出版会、二〇一〇年）参照。

（2）西村天囚は同日原稿の末尾に、これまで「其一」として連載してきた記事を「懐徳堂考上巻」と改題し、上巻はここに完結すると述べている。

（3）但し、明治時代の民間団体世界一周旅行という大事業の全体像を解明するためには、さらに複数の視点が必要であろう。例えば、主催した朝日新聞社にとってどのような意図や成果があったのか、世界一周会に参加した会員にとってどのような意味があったのか、また新聞記事を通してこの旅行の経緯をたどった読者にとってはどうだったのか、さらには、旅行団を受け入れた欧米諸国にとってはどうだったのか、そして、明治時代末期の日本にとって、この世界一周会はどのような歴史的意義を持っていたのか、という点などである。これらについては今後の課題としたい。

（4）ピアーズ・ブレンドン著、石井昭夫訳『トマス・クック物語―近代ツーリズムの創始者』（中央公論社、一九九五年）参照。

（5）明治四十三年一月二日付の東京朝日朝刊には、「日英博覧会見物世界一周会」の告知が掲載され、「日数　往復八十五日」とある。これは、ハワイに向かう途中、日付変更線を越えるため、その分を一日加えたものと推測される。

（6）なお、女性の申し込みについては、第一回同様、「其の同伴者又は保護者の姓名」が必須となっている。これについて有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、二〇〇一年）は、「第一回の際には、申込者の条件として、女性は必ず同伴者が必要である旨明記されていたが、今回（第二回）の申込手続きには、そうした条項はなかった」としている。これは事実誤認であろう。

（7）特派員の内の清瀬規矩雄（号は乾坤生、一八七八～一九四四）は、明治三十年（一八九七）から欧米各国に留学して法学・経済学を学び、サンフランシスコで「日米新聞」の記者となっていた。清瀬がこの一団に合流するのは、四月二十二日、サンフランシスコにおいてである。よって、横浜出港の時点での人数は五十六名であった。

（8）「世界一周」という名称については、現在からすれば、やや違和感があるとも言える。なぜなら、第一回・第二回とも、訪問したのは、アメリカ（ハワイを含む）とヨーロッパ諸国であり、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアの三大陸は含まれていないからである。また、インド、中国などのアジアにも立ち寄っていない。そこで、第一回の特派員であった杉村楚人冠はその紀行を「半球周遊」と呼び、第二回に参加した西村天囚も、「欧米遊覧記」と題して刊行したのである。正確を期する新聞記者としては、当然のことだったと言えよう。しかし、民間人が国外に出ることさえ極めて稀だった当時の日本において、この企画はまさに「世界一周」として人々の目に映ったに違いない。

（9）もともとは、明治三十八年（一九〇五）、日露戦争での勝利を受け、その賠償金を資金として明治四十五年（一九一二）に開催することを企画

した博覧会。しかし賠償金は得られず予算難のため中止となり、五年延期して、改めて明治維新五十年記念の博覧会として一九一七年に開催することとなったが、これも諸般の事情で中止となった。

（10）大鹿武『幕末・明治のホテルと旅券』（築地書館、一九八七年）参照。

（11）天囚の『欧米遊覧記』では「自働車」の表記で統一されているが、当時の新聞記事では揺れがあったようだ。例えば、明治二十八年十二月二十八日付け朝日新聞には「自動車鉄道敷設計画」とあるが、明治三十五年七月二十四付け同紙には「自働車と自転車の衝突」の記事が見える。

（12）朝日新聞社主催第一回世界一周会に特派員として参加した杉村楚人冠の紀行。朝日新聞に送稿され、帰国後、『半球周遊』としてまとめられた。

（13）一八四八年に創設されたボストン公共図書館。史上最初の近代的公共図書館とされる。

（14）タフトは第二十七代アメリカ大統領（任期は一九〇九～一九一三）。なお、第一回世界一周会でも、参加者たちは明治四十一年（一九〇八）四月十八日にセオドア・ルーズベルト大統領に謁見している。

（15）山田迪生『船にみる日本人移住史』（中公新書、一九九八年）、矢口祐人『ハワイの歴史と文化』（中公新書、二〇〇二年）参照。

（16）日本最初の天皇とされる神武天皇の即位年（紀元前六六〇年）を元年とした「神武紀元」による年数。神武紀元によれば、明治四十三年（一九一〇）は、二五七〇年に当たる。

（17）有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、二〇〇一年）は、この満韓巡遊旅行を詳細に分析し、それが日本における初の団体海外観光旅行であったと指摘している。但し同著は、その参加者数に触れた箇所で、「三四七名」「三七四名」「三八九名」「三七五名」とすべて数値が異なっている。明治三十九年（一九〇六）十月十四日付け朝日新聞朝刊は、満韓巡遊船の収支決算報告を明記しているが、会員種別「甲」「乙」「丙」「丁」の総計は「三七八名」となっている。これが正確な数であろう。

（18）有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、二〇〇一年）は、この第二回世界一周会を「マンネリ化したイベント」「二番煎じの印象」と記し、それに活気を与えるものとして期待されたのが、日英博覧会見物であったとする。確かに、日英博覧会が第二回世界一周会の募集の目玉であったことは間違いない。しかし、当時の人々にとって世界一周旅行は想像を絶する大事業であり、行程がほぼ同じだったからといって、わずか二回目で「マンネリ」と捉えられていたのかどうかについては慎重な検討が必要であろう。

（19）阿部幸男「帝政期のロシアの新聞」（『新聞学評論』二十二巻、一九七三年）参照。

（20）もっとも、朝日新聞社ではなく、トーマス・クック社が主催した世界一周旅行はその後も企画された。例えば、明治四十四年（一九一一）二月四日付け東京朝日新聞には、「クック社の世界一周 英国戴冠式と羅馬博覧会」という記事が掲載されている。英国ジョージ五世の戴冠式とローマ博覧会の視察を主目的とするもので、やはり欧米を一周する世界旅行であった。

（21）以下、詳細については、拙稿「ロシア軍艦ディアナ号と懐徳堂」（『懐徳堂研究』、汲古書院、二〇〇七年）参照。

（22）鉄砲伝来および種子島の鉄砲伝来紀功碑については、拙稿「鉄砲伝来紀功碑文の成立」（『国語教育論叢』（島根大学教育学部国文学会）第二十七号、二〇二〇年三月）参照。

（23）日清・日露戦争以後のこうしたアジア（特に中国）への視線の一端については、拙著『軍国日本と『孫子』』（ちくま新書、二〇一五年）参照。

（24）西村天囚の渡清、および張之洞との対面などについては、拙稿「西村天囚の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」（『懐徳』第八十七号、二〇一九年）参照。

【附記】

・本稿は、公益財団法人三菱財団二〇一九年度研究助成「「天声人語」の名づけ親西村天囚の見た近代日本」による研究成果の一部である。また本稿は、二〇一九年六月二十一日、国立台湾師範大学（台北市）で開催された国際学会「多元文明與跨域對話國際研討會」に提出して口頭発表した論文（中国語）を基に大幅な加筆修正を加えて定稿としたものである。当学会において貴重なご教示をいただいた諸氏に厚く御礼申し上げたい。

・明治時代の朝日新聞社の状況などについては、朝日新聞大阪本社寺社文化財みらいセンターの清水謙司氏より懇切なご教示を賜った。また、写真については、西村貞則氏、懐徳堂記念会、朝日新聞社より掲載のご許可をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

明治時代日本人所看到的「世界」
——漢學家西村天囚的世界環遊旅行——

湯淺邦弘

明治43年（1910）４月６日，參加由朝日新聞社主辦的第二回周遊世界之旅「世界一周會」的會員們，乘坐東洋汽船會社汽船地洋丸從横濱港啟程。其中一人，便是以特派員身份參與旅行的西村天囚。

西村天囚（1865～1924），大隅國種子島西之表（現在的鹿兒島縣西之表市）出身。名時彥，字子駿，號天囚、碩園。初學於鄉里儒者前田豊山，後於明治16年（1883）入學東京帝國大學古典講習科。中途退學後，入社大阪朝日新聞。天囚醉心於江戸時代的大阪學問所「懷德堂」（1724～1869），並致力於其學舍的復興。其具體的行動之一，便是在大阪朝日新聞上連載「懷德堂研究其一」。

在懷德堂復興運動中，天囚參加「世界一周會」的行為到底具有何等意義？　本稿雖涉及此次世界一周會。但考察的首要視角，則在於通過此次旅行天囚看到了一個怎樣的「世界」？。

此次考察的主要資料，為天囚的『歐米遊覽記』（明治43年10月，朝日新聞合資會社，全610頁）。

天囚直率地對歐美先進的文化發出驚嘆並抱有嚮往之情。但是同時，也以冷靜的眼光進行觀察，對日本的歷史及文化進行了「重新發現」。

對於西村天囚自身而言，該世界一周會又具有怎樣的意義？　天囚暫時中斷了朝日新聞的連載「懷德堂研究」，參加了此次旅行。歸國後，重開連載，後將其總結為一冊『懷德堂考』。翌年（1911）10月５日，追悼江戸時期懷德堂教授的師儒公祭（懷德堂記念祭）在大阪舉行，懷德堂的復興運動正式開始。大正５年（1916），「重建懷德堂」在大阪市内竣工，天囚則在其中職掌教鞭。在這一系列的懷德堂復興運動中，天囚參加世界一周會的親身體驗對其影響極大。特別是，在歐美看到當地教育及報紙的普及、圖書館的充實、以及對先人的彰顯等狀況後，更加堅定了天囚在大阪之地再建懷德堂的決心。